

今回の研究大会を通して、以下の成果が挙げられた。

①主体的に授業に臨む児童の増加

本校の研究主題である、「対話を通して、主体的に学習しようとする児童の育成」のために教材研究を行い、児童らの身近に生息している自然物を使った授業を展開した。その結果、授業中のみならず、登下校中や放課後、休みの日などの授業時間外にも、自然物の収集を行い、学校に持ってきて紹介する児童が多く見られた。また、休み時間にも校庭で植物を集めたり、自分たちが考えた遊びをクラスメイトと行い、意見を出し合いながら手直しを加えたりする姿が多く見られた。また、図書の時間には草花に関する本を借りる児童や、自分が作りたいもののために、家から材料を持ってくる児童の姿も見られた。これらのことから、教師主導で行うのではなく、児童が自ら考え、楽しんで学びを深めることができたように思われる。

②対話のスキルが向上した。

今回の研究授業を行う前までは、児童と教師の一对一のやり取りで授業を進めることが多く、児童同士が対話する場面を作ることができていなかった。それによって、教師の問いかけに対して単語で答えたり、他の児童の発表に対しても反応が無かったりしていた。児童同士の対話によって授業が進行するように教材研究を行い、教師が板書に徹して、いちいち児童の発言を復唱したり補足したりしながら授業を進めたりすることをやめ、自分の意見を伝える際には、丁寧に話すことを徹底して指導した。それらの取り組みによって、児童らは、「私は～だと思います。」と発表することができるようになり、また、それに対して聞いている児童も、「いいと思います。」「ちょっとちがうと思います。私は～だと思います。」などの反応を送ったり、「○○さんに質問です。～はどういうことですか。」などの、質問をしたりできるようになってきた。また、これらの様子は生活科の授業だけでなく、別教科の授業でも見受けられるようになった。

今後の課題としては、以下のことが挙げられる。

①単元ごとの授業数が増え、すべての単元が終わらない

児童主体でじっくりと納得いくまで対話しながら授業を進めることで、予定していた授業数では到底収まらず、急ぎ足で進めてしまう授業が多くできてしまった。

②発表の苦手な児童への配慮

児童主体で話し合いを進め、全員が納得できるまで話し合おうとすると、1時間話し合いだけで終わることもある。対話スキルの身についてきた児童にとっては、学びとなる1時間になるかもしれないが、まだ身につけていない児童にとっては、ただひたすら友達が意見を戦わせているのを座って聞くだけの1時間となってしまっている。また、人前での発表を苦手としている児童もいる。振り返りやワークシートの記述を見れば、非常に良い着眼点をもっており、全体に意見を言うことができれば、みんなで考えを深めることができそうなことでも、それが授業の中で表出してこない。そういった児童に対しては、こちらからうまく後押しを行ったり、代わりに全体に話したりしてもいいのではないかと考えた。

以上のことから、特に低学年では、ある程度授業の本筋（めあて）へ導いていけるような教師のかじ取りが必要であり、また、対話スキルの身につけていない児童や、人前での発表を苦手としている児童らが十分に学べるよう、個別の支援、個別の配慮が多く必要であると考えます。そういった児童も含め、学級全体で「主体的・対話的で深い学び」ができるよう、これからも研究を続けていきたい。